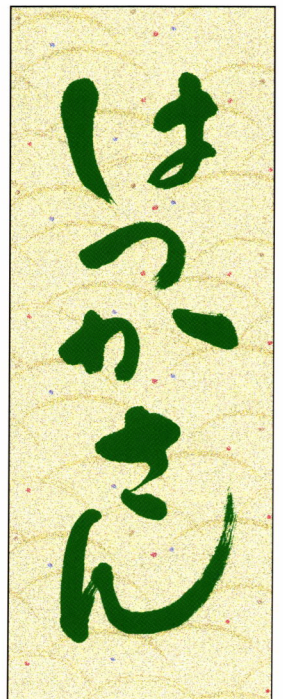


国道一八〇号線の道路改良事業（南部バイパス）に伴い、天津運動公園わきから約千五百年前（古墳時代）の円墳四基と、葬式で供え物を盛るのに使う供献土器二十五点が出土しました。

円墳は法勝寺川左岸の標高二十五〜四十六メートルの丘陵地に計



第 19 号
 発行
 天津地域振興協議会
 総務企画部編集委員会
 印刷
 米子ワークホーム

らし始めるのは弥生時代後期、山の斜面を削って造った平坦面に竪穴住居や掘立柱建物が造られています。

道路として使ったと思われる丘



周溝内に供献された土器

四基（直径十三〜十八メートル）あり、墳丘部は残っていませんが、円墳を囲むように掘られた周溝から長さ百八十メートル、幅六十センチメートルの埋葬施設跡が十三カ所見つかりました。「周溝内埋葬」と見られ、墳丘部に埋葬された長の家臣や近親者を葬ったと考えられます。

この遺跡で山の斜面に人々が暮

生活の場から墓地に転換して、尾根東側に二基の円墳が作られます。この円墳は、隣接する福成早里遺跡の古墳と一連のものと考えられます。二基の円墳はいずれも同じような時期に作られており、構築方法なども類似しているが、残念ながら墳丘部は奈良時代の削平により失われています。



出土した埴瓶

その後、古墳時代中期になると、陵を横切っている細長く固く締まった平坦面もありました。



八角形の竪穴住居跡

仕上げが丁寧で傷もない上物で、偶然起きた土砂崩れで埋まったらしく、ほぼ完全な状態で見つかりました。

点数の多さと状態の良さは山陰地方でも珍しく、当時を知る貴重な資料です。（渡邊 悦朗）



土杭内から出土した甕

供献土器は、直径約十四センチの高坏、高さ約十七センチの壺、同十センチのかめで、大半は土師器と言われる比較的やわらかい土器です。食べ物や酒を供えたように、表面処理が丁寧で、日常使った形跡がないことから葬送儀礼の専用として使われていたようです。

田畑や住居の適地が多い一等地で、有力者もいたと思われませんが、村長級とみられる被葬者は不明です。

ベンガラで赤彩された直口壺は、

あまつのお店紹介
田子モータース(境)



秀峰大山を正面に仰ぐ仕事場で
自動車の修理に励んでいる田子モ
ータースの田子信朗氏を訪ねました。

父の故豊氏が昭和三十七年一月
に元法勝寺駅前で自動二輪車の修
理業を始めてから、元天津農協跡
(現株式会社TMS駐車場) を経
て昭和四十七年から福成の現在地
で今日に至っている。信朗氏は昭
和五十一年に二級整備士資格を取
得すると、それまで勤めていた北
陽ホンダを退職し、三級整備士の
資格を持つ奥様と二人三脚で共に
助け合いながら『お客様の要望を
第一に』をモットーにして病氣一
つせずに頑張っている。

趣味のクレー射撃では中国地区
チャンピオン四回を含め十三回の
国体出場を果たし、優秀な成績を
収めている。二人の息子さんは信
朗氏の跡を継ぐ気はないようであ
るが、素晴らしい環境でお客様を
大切にし、良い汗を流す喜びを感
じながら、これからも体力の続く
限り明るく元気で頑張る決意を示
してくれた田子モータースを紹介
しました。

(大塚 賢一)

〈営業案内〉
営業時間
午前八時三〇分～
午後十七時三十分まで

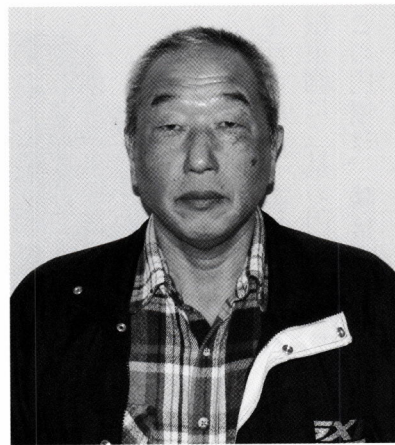
定休日 日曜・祝日

☎ 0859-6612153

あの人この人

谷川かわら版 広報部長

野口 憲一さん (谷川)



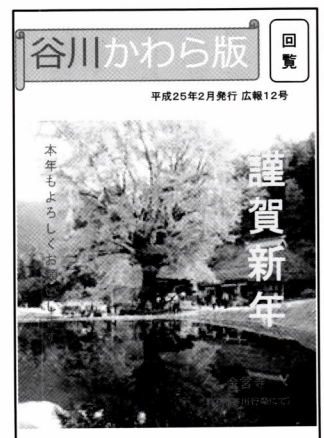
今回は、集落の情報を発信して
いる「谷川かわら版」の広報部長
野口さんを紹介します。

谷川で広報部が誕生したのは、
平成二十二年のことです。区長を
経験された野口さんは、「区会は
年四回しかなく、皆さんにいろん
な情報を知ってもらう機会がない」
と他の区長経験者の方に話したと
ころ、みんな同じように思ってい
て、広報のようなものがあれば集
落間の情報が共有できるというこ
とで、集落から年一回助成金一万
円を出してもらい立ち上がったそ
うです。

メンバーは、区長経験者八名で
構成されています。担当を決め、
その人が写真撮影から原稿作成ま
で行い、それをパソコンでレイア
ウトし、最後に皆で原稿をチェッ
クして作っておられます。

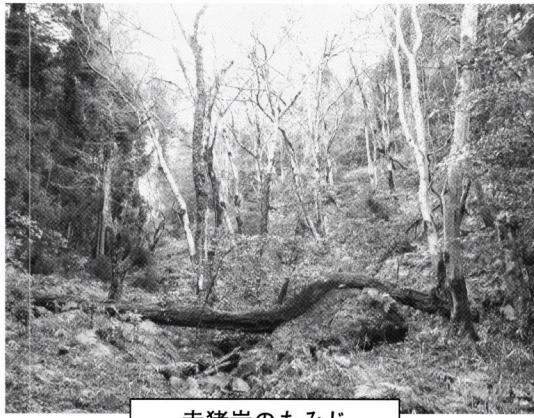
記事の内容は、おめでたいこと
(結婚・出産・入学・成人など)
を中心に、旬な話題や各部の活動
を紹介し、集落の情報を共有でき
るよう心がけておられ、特にシリ
ーズで取り上げている「歴代区長紹
介」では、その人の思い出や軌跡
などを紹介することによって谷川
の歴史が分かるようになっており、
これを楽しみにしている方が多い
そうです。

これからも、世代間の情報共有
の広報として、谷川の歴史を記録
に残し後世に伝えてもらいたいと
思います。
(佐伯 明日香)



清水山の
「赤猪岩」ともみじ

大正十三年法勝寺電車が米子と法勝寺を結ぶ十二・四キロを走ることとなった。天津駅の設置が決まると清水川地区内の有志が観光の目玉にしようと「清水井」「赤猪岩」の沿道に桜やもみじの木を植えた。桜は枯れて当時の様子を知らぬ人もないが、もみじは「赤猪岩」を取り囲むように今も残っている。



赤猪岩のもみじ

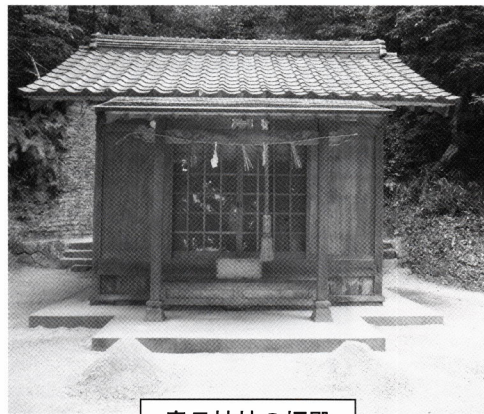
奥長山の「赤猪岩」と寺内の赤猪岩神社境内に鎮座されている赤猪岩とどちらが本物かという論議は、昔から清水川地区の人には奥長山が本物として伝わっている。



元法勝寺電車 天津駅 (写真：故祖田定一氏)

汗を流して植樹されたその気概が、今も春や秋には色を携え人の訪れを待っているかのようである。しかし周囲には雑木が生い茂り、時たませせらぎから覗く沢蟹と猪の足跡を見るだけである。平成二十四年は、古事記編纂千三百年にあたり、清水川地区民もこれを機会に二十年振りに山道づくりを復活することとなった。電車開業時の生き証人であるもみじを私たちは守っていきたく思っている。(大塚 賢一)

神社シリーズ
春日神社 (坂根)

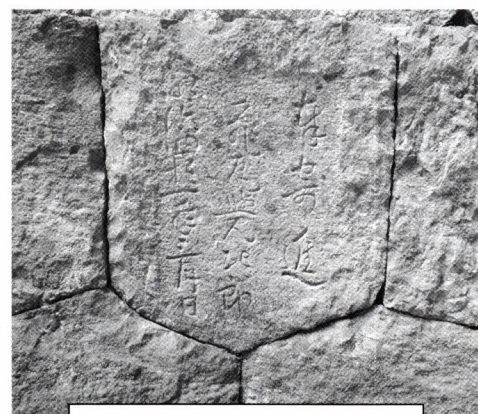


春日神社の拝殿

坂根集落の産土神社で、祭神は天津児屋根命・大日靈貴命(天照大神)・素盞鳴命。創立年代は不詳ですが徳川初期の文に「富田庄柏尾郷春日大明神」と書いてあるものがあります。これは、柏尾郷が柏尾・谷川・坂根の三集落に分かれる以前より祀られていたということになります。また、明治の新しい村ができる頃、坂根集落の亀尾戸長(町や村で民選された長)が、村の名を決めかねて相見宮司に相談し、春日神社の祭神から名前をいただいて天津村になったという有力な説があります。

また、明治の新しい村ができる頃、坂根集落の亀尾戸長(町や村で民選された長)が、村の名を決めかねて相見宮司に相談し、春日神社の祭神から名前をいただいて天津村になったという有力な説があります。

これを裏付けるかのように、境内の石垣には「御寄進 亀尾覚次郎 明治四十一年三月日」と彫られており、亀尾戸長が寄進をされたようです。



石垣には寄進が刻まれている

また、奈良の春日大社の鹿が神示を持って一夜の間に奈良と坂根を往復したという伝説が伝えられています。



鹿と思われる石像

大正五年に福田神社に合祀されましたが、昭和二十二年に旧地に復して福田神社飛地境内社となっています。

(渡邊 悦朗)

谷川坂今昔物語



真っ直ぐのびる谷川坂

南部町内を通る国道一八〇号線の福成地内にある谷川坂、峰から法勝寺方面を眺めると、道は真っ直ぐに約四キロ続きます。この真っ直ぐな道はいつできたのか探ってみました。

江戸時代から明治にかけて、谷川の山の麓には出雲や備後に通じる重要な街道が通っており多くの牛馬や人々が往来していました。明治十四年に山の麓の道から、平坦地を真っ直ぐにつなぐ県道計画ができあがり、現在の直線道路は明治十九年に完成しました。当時は、役所の命令を受けた業者が土

地所有者の承諾もなしに私有地に入り込み測量をしたそうで、家や蔵、庭を分断された所もあり、かなり傲慢なやり方で道は完成しました。当時はお上の命令次第で何でも出来たが、田んぼだけは大事にして道をつけていたそうです。

新しく出来た道は「新道（しんどう）」と呼ばれ大八車が二台行き違える広い道として喜ばれました。勾配のきつい谷川坂は難渋の地で、上がりきった峰には茶屋があり、酌婦さんもいて賑わったそうです。谷川坂の今昔物語です。

(野口 隆資)



昭和31年の谷川坂
矢吹壺さん撮影



平成24年広報編集委員

編集後記

一年に四回発行する広報「はつかさん」、今年度は総務企画部の四名が担当してきました。

基本は、古事記編纂一三〇〇年にちなみ、神様にまつわる神社の紹介、天津のお店紹介、活躍する人々の紹介をしてきました。毎回、編集会議を開催し役割分担を決めて取材を行い、出来上がった原稿のチェックも編集委員で何度も読み直しをして発行してきました。

広報誌は、地域の情報を伝え、地域の活性化につながる役割があります。地域の皆さんに親しんでいただける広報「はつかさん」、これからも天津の広報誌としてご愛読いただきたいと思えます。本年度のスタッフは今回で卒業します。ありがとうございました。

(野口 隆資)